

## 当院における経胃瘻的空腸チューブ挿入例の臨床成績

那覇市立病院 外科<sup>1)</sup>, 消化器内科<sup>2)</sup>

長濱 正吉<sup>1)</sup> 平安座 啓<sup>1)</sup> 寺師 宗秀<sup>1)</sup> 鹿川大二郎<sup>1)</sup> 新里 千明<sup>1)</sup>  
高宮城陽栄<sup>1)</sup> 知花 朝史<sup>1)</sup> 上江洲一平<sup>1)</sup> 知念 順樹<sup>1)</sup> 佐辺 直也<sup>1)</sup>  
金城 泉<sup>1)</sup> 宮里 浩<sup>1)</sup> 友利 寛文<sup>1)</sup> 島尻 博人<sup>2)</sup>

## 要 旨

経胃瘻的空腸チューブ（以下、PEG-J）は胃瘻を腸瘻化することで、胃瘻関連の合併症を回避する方法である。今回私たちは当院のPEG-J例を20歳代と30歳代以上の2群に分けて、その臨床成績から安全性などを検証した。対象症例は2012年5月から2021年10月までに当院でPEG-Jが施行された10例（男性4例・女性6例：24～78歳）。施行時年齢が20歳代の4例（以下、Y群：男性2例・女性2例）と30歳代以上の6例（以下、O群：男性2例・女性4例）に分けて、臨床成績を比較した。基礎疾患では、Y群は全例脳性麻痺で気管切開が施行されていた。O群はShy Drager症候群、窒息による低酸素脳症、下咽頭癌・頸部食道癌合併アルコール性肝硬変、脳出血および脳梗塞後遺症、横行結腸癌術後腹膜播種が各1例ずつと多岐にわたっていた。PEG-J関連の重篤な合併症はなく、Y群の2例では胃瘻に再度変更されていた。PEG-J後の生存期間はY群で13～3351日（中央値：2263.5日）、O群で39～771日（中央値226.5日）でY群が長い傾向であった。当院のPEG-J例は安全に管理されていた。

**Keywords:** 経胃瘻的空腸チューブ, 脳性麻痺, 気管切開

# 外来新来患者の受診状況から見た当科の現状と課題

那覇市立病院 歯科口腔外科<sup>1)</sup>

看護部歯科衛生士<sup>2)</sup>

仲盛 健治<sup>1)</sup> 津波古 判<sup>1)</sup> 津波古京子<sup>1)</sup> 平識 亘<sup>1)</sup>  
井上 淳子<sup>2)</sup> 小禄 理子<sup>2)</sup> 喜納 玲子<sup>2)</sup>

## 要 旨

那覇市立病院歯科口腔外科（以下、当科）の2015–22年の7年間の調査結果を元に現状と課題を提示する。

### 1. 現状

#### 1) 新来患者数の年次推移

2015–19年までは毎年増加傾向にあったが、2020–22年は新型コロナウイルス感染症の影響で減少した。

#### 2) 新来患者の内容

新来患者の約90%は紹介患者。その主体は埋伏歯・併存疾患を有する患者の抜歯依頼、入院患者の口腔衛生管理依頼であった。

### 2. 課題

新来患者のほとんどが紹介患者であることから、新来患者への依頼内容＝当科が求められていることと考える。

1) 埋伏歯抜歯依頼が最も多いことは、当科が歯科口腔外科の専門医療機関として求められていると考えられる。

2) 埋伏歯以外の抜歯依頼の多くは併存疾患を有し、加療中であった。これら患者の病態を整理し、医科と歯科の懸け橋としての当科の役割が求められている。

3) 院内入院患者の口腔衛生管理のニーズへの対応は、国の推進する医科歯科連携の強化にも大きく関わっている。

**Keywords;** 歯科口腔外科, 新来患者, 口腔衛生管理

# 放射線治療部門のホームページ更新の分析結果から分かる 内容評価や新規患者数との関係性

那覇市立病院 医療技術部 放射線科<sup>1)</sup>, 事務局 経営情報企画課 企画グループ<sup>2)</sup>  
江崎 正二<sup>1)</sup> 山岸 直也<sup>2)</sup> 宮里 麻鈴<sup>2)</sup>

## 要 旨

那覇市立病院（以下、当院）は、2022年12月末にホームページ更新が行われ、放射線治療部門のホームページの内容も刷新した。そこで今回、新放射線治療装置Halcyon<sup>TM</sup>の周知を目的として、患者（読み手）に求められている内容であるかをWebページ解析ツールであるGoogle Analyticsを用いてホームページの分析を行った。各ページのセッション数（アクセス数）、滞在時間、離脱率や直帰率などを調べて、ページ内容の評価や新規患者数との関係性を調べた。分析結果は、内容の検討を促すページを指摘する一方で、特に「乳房照射・左乳房DIBH」は、高いスクロール率やユーザビリティの面からも読み手（患者）にとって内容に満足しているという結果となった。そして、ホームページへのセッション数が増えると新規患者紹介数も増えることにも相関が認められた。

よって、広報活動の中でも、特にホームページは重要であり、セッション数を増やすことで新規患者件数の増加や患者サービス向上のためにも定期的な内容評価は必要である。

**Keywords;** Google Analytics, ホームページ, 新規患者数増加, ユーザビリティ, 広報活動

# 新型コロナウイルス（COVID-19）感染症拡大下における 当院のNST活動の変遷

那覇市立病院 医療技術部栄養科<sup>1)</sup>, 外科<sup>2)</sup>, 看護部<sup>3)</sup>, 薬剤科<sup>4)</sup>  
宮城 将允<sup>1)</sup> 長濱 正吉<sup>2)</sup> 村山 笑<sup>3)</sup> 長嶺 元気<sup>3)</sup>  
糸数 麻希<sup>3)</sup> 普天間 誠<sup>3)</sup> 比嘉 大輔<sup>4)</sup> 平良沙希子<sup>4)</sup>

## 要 旨

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大で、断続的な活動であったが継続した当院のNutrition Support Team（NST）活動の変遷について報告する。また、COVID-19患者受け入れ前の2019年度から受け入れ後の2021年度までのNST介入患者件数及び、2019年度と2021年度のNST介入前後の栄養指標である血清Alb値、及びBody Mass Index（BMI）を比較した。

調査期間におけるNST介入者数はCOVID-19患者受け入れ前の2019年度が361件、受け入れを開始した2020年度が379件、2021年度が365件となり、COVID-19患者受け入れ後もNST介入件数は減少することは無かった。また、2019年度のNST介入前後の血清Alb値は2.2g/dlから2.5g/dlへと有意に上昇し、2021年度も血清Alb値が2.2g/dlから2.4g/dlへと有意に上昇していた。BMIでは2019年度のNST介入前後で21.1kg/m<sup>2</sup>から20.3kg/m<sup>2</sup>と有意に減少し、2021年度のBMIも21.2kg/m<sup>2</sup>から20.3kg/m<sup>2</sup>と有意に減少していた。

COVID-19感染症拡大下における当院のNST活動は様々な制限のかかる中においても介入件数が減少することなく、栄養状態の改善に寄与していたことが示唆された。

**Keywords;** Nutrition Support Team（NST）、COVID-19、栄養管理

# 那覇市立病院におけるCOVID-19診断時の核酸検出検査手法の比較検討

那覇市立病院 医療技術部検査科

宮城ちひろ 大城 健哉 平良ひかり 真栄田百合子

## 要 旨

当院では新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）感染症（COVID-19）診断時の遺伝子検査として、ELITe InGenius, GeneXpert, Smart Geneを用いたpolymerase chain reaction（PCR）法とLoopampEXIAを用いたloop-mediated isothermal amplification（LAMP）法を行っている。LAMP法については、当初インフルエンザウイルス用抽出試薬にて抽出（簡易抽出LAMP法）を行っていたが、magLEAD 6 gC /12gCにて抽出を行うLAMP法（mLAMP法）に変更した。

今回、LAMP法における抽出法の比較、ELITe InGenius（EG法）でのCt値とmLAMP法でのTt値の関係性について、4つの測定方法の機種間差についての3項目を検討した。

LAMP法における抽出法の比較では、mLAMP法は簡易抽出LAMP法より低濃度域の検出が可能であった。

EG法でのCt値とmLAMP法でのTt値の関係性については、Tt値15:00以上でCt値とTt値は相関係数 $r=0.99$ で強い正の相関があり、回帰直線より $Ct値=1.1786 \times Tt値（小数点時間）+13.72$ で表せると考えられた。この換算式より、当院の測定方法ではTt値18:03以上でCt値35以上となると推測された。

GeneXpert, Smart Geneも含めた4つの測定方法の機種間差については、GeneXpert, mLAMP法, EG法, Smart Geneの順でより低濃度まで検出できると考えられた。

**Keywords:** COVID-19, SARS-CoV-2, 核酸検出検査, PCR法, LAMP法

# 間質性肺炎が先行し急速進行性糸球体腎炎と十二指腸潰瘍を呈した 顕微鏡的多発血管炎にIgA腎症を合併した一例

那覇市立病院 腎臓・リウマチ科

喜瀬 高庸 喜納みちる 上間 貴仁 上原 圭太 糸数 昌悦

## 要 旨

ANCA関連血管炎は抗好中球細胞質抗体が病態に関与し重要臓器障害を呈する疾患群である。今回我々は、間質性肺炎が先行し急速進行性糸球体腎炎と十二指腸潰瘍を呈した顕微鏡的多発血管炎にIgA腎症を合併した稀な一例を経験したので報告する。

症例は30代男性。抗好中球細胞質ミエロペルオキシダーゼ抗体（MPO-ANCA）価の上昇以外に血管炎に特徴的な臨床症候を認めず経過していたが、当科初診時に急速進行性糸球体腎炎が判明したため積極的な免疫抑制療法を行い寛解を達成することができた。Subclinicalではあっても本症例の様にMPO-ANCA値の上昇がANCA関連血管炎の発症を予測し得る可能性があるため、密な臨床経過のフォローと早期診断・早期治療が重要であると考えられる。

**Keywords;** MPO-ANCA, 顕微鏡的多発血管炎, 急速進行性壊死性糸球体腎炎, 十二指腸潰瘍

## 掌側月状骨窩辺縁骨片と関節面中央陥没骨片を伴う 青壮年橈骨遠位端骨折の2例

那覇市立病院 整形外科<sup>1)</sup>, 琉球大学 整形外科<sup>2)</sup>  
北城圭一郎<sup>1)</sup> 岳原 吾一<sup>1)</sup> 西田康太郎<sup>2)</sup>

### 要 旨

難治性骨折の一つとされる掌側月状骨窩辺縁骨片と関節面中央陥没骨片を伴う青壮年橈骨遠位端骨折に対し、掌側骨折部から経骨髄打ち上げ整復後に人工骨 $\beta$ 型リン酸三カルシウム（以下 $\beta$ -TCP）の充填とvolar rim distal radius plate®（Depuy Synthes 社）を用いた固定により良好な結果が得られた2例を報告する。

【症例1】49歳，男性，右側例。手術は掌側骨折部から陥没骨片を経骨髄的に軟骨下骨ごと打ち上げて関節面を整復し，生じた骨空隙（fracture void）に $\beta$ -TCP ブロック片を大小作成して密に充填した後，掌側骨片を還納してvolar rim distal radius plate® で固定した。

【症例2】50歳，男性，左側例。掌側骨片を遠位に反転して経骨髄的に陥没骨片を整復し，症例1同様に固定した。2例ともに関節面は抜釘後も維持されており，良好な可動域が得られた。

**Keywords:** 青壮年橈骨遠位端骨折，掌側月状骨窩辺縁骨片，関節面陥没骨片，経骨髄整復

# 多発性骨髄腫治療中に大腸菌による 両側壊死性筋膜炎を生じ救命した1例

那覇市立病院 初期研修医<sup>1)</sup>, 総合内科<sup>2)</sup>

宮本 てん<sup>1)</sup> 知花なおみ<sup>2)</sup> 湧川 朝雅<sup>2)</sup> 眞志取多美<sup>2)</sup>

## 要 旨

壊死性筋膜炎は早期診断、早期治療を要する致命的疾患である。多発性骨髄腫治療中の70歳代男性が数日前からの発熱、両下肢痛で来院し、両下肢壊死性筋膜炎の診断でデブリドマンと抗菌薬治療を開始し入院となった。その後血液培養と膿培養から大腸菌が検出され、感受性のある抗菌薬を大量に投与していたが、感染源のコントロールが困難であったため、左下肢切断術を施行し、6週間の抗菌薬治療を行い救命することができた。

本症例では、起炎菌が大腸菌で病変が両下肢にあるという点が非典型的であり、またデブリドマンと大量の抗菌薬投与に加え、下肢切断が救命のために必要であった。免疫抑制状態の患者ではこのような経過をたどることがあり注意が必要である。

**Keywords:** 壊死性筋膜炎, 多発性骨髄腫, 大腸菌, 敗血症



## 当院における下肢末梢動脈疾患重症化予防へ向けた取り組み —多職種連携で実践した3症例を通して—

那覇市立病院 看護部 外来 糖尿病看護認定看護師  
仲間 長乃

### 要 旨

当院では下肢末梢動脈疾患重症化管理にあたり、すべての透析患者に対し、担当看護師が足の観察・アセスメント・評価・記録を行い、足病変リスクの高い患者を抽出している。その足病変リスクが高い患者を透析室担当医師が循環器・整形外科・皮膚科などの必要な科へコンサルテーションを行い、保存的治療や観血的治療に繋いでいる。しかし、下肢末梢動脈疾患重症化に繋がるようなリスクの高い足に対して、巻き爪や肥厚した爪の爪切り、胼胝処置などの医療者による予防的フットケア（以下、メディカルフットケア）は行えていなかった。そこで下肢末梢動脈疾患重症化予防の取り組みの一環として、足病変の重症化しやすい透析患者のメディカルフットケアを始めた。その取り組みを通して下肢末梢動脈疾患の診断と治療に繋がった症例を報告した。

症例の報告は3症例。下肢末梢動脈疾患への診断と治療へ繋がった1症例、足病変の治療へ繋がった1症例、多職種連携でフットケアサポートを行った1症例であった。

**Keywords;** 下肢末梢動脈重症化管理, 人工透析, フットケア